

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目: 第 外国語 (英語) / 専門科目 ()

試験時間: (90) 分

次の文章は Irmela Hijjya-Kirschner の *Rituals of Self-Revelation* の一節である。これを読んで以下の問いに答えよ。

In the Preface to his voluminous study on modern Japanese fiction Shinoda Hajime explains his approach: “(1)I sought to make clear the appearance (*arivō*) that modern Japanese literature has attained, by cutting it off from the everyday space and time, where it originated, and placing it in the realm of imagination, where it belongs to no particular person or time.” (2)Although we may not often encounter statements as explicit as this one, the approach itself is very widespread indeed, not only in Japanese, but also, albeit to a lesser extent, in Western literary scholarship. Literature continues to be seen today, as it was in the past, as an autonomous creation lacking any recognizable connections to other, non-literary contexts. According to the view generally accepted in Japan, a work of art is self-explanatory and stands on its own, except for a possible reference to the artist's personality. On this basis there exists neither temporal nor spatial distance from it: “Reading a work of literature means directly confronting a stranger and developing a relationship with him or her.” This is not to deny that there have been attempts in Japan at relating literary to general history, but these have usually been limited to juxtaposing individual works or schools of literature with actual political events without attempting a closer description of the mutual effects suggested by the juxtaposition.

While the present state of research does not permit a systematic correlation of literature and history, the view that literature is an autonomous form of art created in a vacuum is clearly no longer tenable.

(3)In Western scholarship, literature has come to be regarded as a complex semiotic system that cannot be understood by cutting it off from its various contexts. This is not, however, the place to repeat the more recent arguments in literary theory which already form the basic knowledge of much of non-Japanese philology. A reference to these theories is necessary only to illustrate the limits of conventional Japanese attitudes and to explain the approach adopted in this study.

All previous works on the *shishōsetsu* genre have used Tayama Katai's story “(A)Futon” as both their starting point and focus of discussion. “Futon” is considered to be not only the first work of the genre but also a model. One should scrutinize such a viewpoint, and I will therefore examine in detail both the work itself and the historical moment in which it appeared. This serves to show the conventional understanding of the work and its role in shaping the genre, and it also provides the basic information necessary for the genre theory developed here. (4)More importantly, I shall consider the point of intersection of this story with other lines of development (which has not until now received serious attention) so as to shed new light on the genre that emerged from it.

Having stated the importance of the intrinsic relationship between work and context, I have endeavored to examine the origins of both “Futon” and the genre in the light of numerous different—although not all conceivable—contexts. This approach contrasts with the accepted Japanese pattern of a monolinear explanation based on literary-intrinsic factors or, even more frequently—due to the popularity of biographical interpretation, or rather, “biographism” in Japan—on the author's psyche. (5)Political and intellectual history or Japanese naturalism, therefore, provided not merely the background against which the individual work was written and the *shishōsetsu* genre originated, but also the factors instrumental to its development. It is often difficult to determine the correct emphasis to place on a particular factor and its relative significance, because the essential factual and theoretical research has not yet been carried out. Nevertheless, the following discussion should allow us to understand and assess the appearance of this particular work and the development of the *shishōsetsu* genre in the context of its varied determining factors.

【注】 Shinoda Hajime …篠田一士 (文学研究者) explicit …明白な albeit …～ではあるが autonomous …自律的な self-explanatory …自明な juxtapose …併置する tenable …持ちこたえられる semiotic …記号の philology …文献学 scrutinize …吟味する intrinsic …内在的な monolinear …単線的な

問1 下線部 (1) を日本語に訳せ。

問2 下線部 (2) を日本語に訳せ。

問3 下線部 (3) を日本語に訳せ。

問4 下線部 (4) を日本語に訳せ。

問5 下線部 (5) を日本語に訳せ。

問6 著者の Irmela Hijjya-Kirschner は二重傍線部 (A) の作品をどのように検討しようとしているか。説明せよ。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士) 博士後期・前後期共通)

試験科目: 第 外国語 (日本語) / 専門科目 ()

試験時間: (90) 分

問題 以下は、ツベタナ・クリステラ『心づくしの日本語』の一節である。これを読んで、以下の問に答えよ。

(なお、問一は解答用紙、問二は原稿用紙を用いること)。

一九一三年にノーベル文学賞を受賞した最初のアジア人、インドの詩人ラビンドラナート・タゴール(一八六一―一九四二)は、一九一六年に来日したとき、慶應義塾大学で「日本の精神」という講演をして、日本の伝統的な文化について次のように述べた。

日本は一つの完全な形式をもった文化を生んできたのであり、その美の中に真理を、真理の中に美を見抜く視覚を發展させてきました(中略)。日本は正しく明確で、完全な何物かを樹立してきたのであります。それが何であるかは、あなたがたご自身よりも外国人にとって、もっと容易に知ることが出来るのであります。それは紛れもなく、全人類にとって貴重なものなのです。それは多くの民族の中で日本だけが単なる適応性の力からではなく、その内面の魂の底から生み出してきたものなのです(迷える小鳥』二〇一頁)。

詩人ならではの感情的な言葉だが、日本の伝統的な文化が「美の中に真理を、真理の中に美を見抜く視覚を發展させてきた」ことも、こうした視覚は「紛れもなく、全人類にとって貴重なもの」であることも、間違いないだろう。

さらに、タゴールは、「日本は、森の葉ずれの囁きや溜め息、あるいは波のすすり泣きを、心の中に取り入れてきました」(一八八頁)と指摘し、日本人の自然観を美意識に結びつけて、日本の伝統的な文化の「力」、日本民族の「天才」として評価した。

自然はその力を、美の形の中に保持することを貴方がたは発見されました。(中略)愛と喜びの中で、自然と結合するというそのことこそ、真の天才の成す業であります。日本民族はその天才を示したのであります(一八七頁)。

他方、タゴールがこのような日本文化を称賛した裏には、アジアにおける西洋文明の「物質力」や「利己主義」の広がりに対しての批判が透けて見える。

二十世紀の始めは、インドはまだイギリスの植民地であり、タゴールの故郷ベンガル州では反英運動がとくに激しかった。知識人の名家の出だったタゴールは、インドの古典を学び、その長い歴史を誇りに思っていたので、「拡張しつつある西洋の文明の前に、膝を折る必要があるのでしょうか」(一九九頁)と、アジアの「西洋化」に対する強い反発をあらわしていた。

その一方で、タゴールは、イギリス留学を通じて、西洋の文化も身につけたので、「西洋から学ぶべきものも多くある」(二〇四頁)と指摘している。要するに、彼が強烈に批判していたのは、西洋文化自体ではなく、その文化の支配をむやみに広げようとする戦略であり、またひたすら「西洋の外面を模倣する」盲目的な試みであったのだ。

近代化が進む大正時代の日本においても、あちこちでこうした試みを見かけたからだろうが、タゴールは次のように忠告している。

私には、西洋の外面を模倣することが——その傾向は現に今こゝ日本において益々顕著となっておりますが——日本の力と安定にとってなくてはならぬ必要であるとは、けっして考えられません。それは日本の本性に重荷を加え、弱さを惹起しつつあるので、この事実は時が経つにつれて、いよいよ深刻に感じられるでありましょう（一九三頁）。

それから百年たつて現在の目で見れば、タゴールの危機感が過剰なものだったことは明らかであろう。彼が激しく非難した西洋文明の科学や技術は、その間にめざましい発展をとげ、日常生活をより豊かなものにした。また、日本は、西洋諸国と首位を争うほど科学技術の発展に貢献してきたので、けっして「弱く」なったとはいえない。

そして、日本の伝統的な文化のほうもけっして姿を消したわけではない。それは日常生活の細部から神社やお寺まで、目に見えるところにもあるし、人の心という目に見えないところにもあるだろう。そもそも、タゴールが称賛した日本の「精神的文化」は、どれほど時代の嵐にさらされても、容易に消えるほど脆弱なものではない。

それにしても、タゴールが、アジアを代表する知識人の一人として、西洋文明の流行に對して抱いていた疑問には、全く根拠がなかったというわけでもない。日本の伝統的な文化はけっして消滅しなかつたとはいえず、現代の社会ではその評価が大いに変わったらしいからである。近代化とともに日本に流れ込んだ西洋文化の価値観——「異なる文化」の価値の基準が、伝統文化を見る目を変えた。敗戦後の敗北感が自信の喪失につながったことも、事実であろう。

そもそも、「美の中に真理を、真理の中に美を見抜く視覚を發展させてきた」日本の文化や文学は、武力や戦争にはほど遠いものである。しかし、『源氏物語』でさえナショナリズムを盛り上げるために悪用されることもあったからだろうが、敗戦後には伝統的な文化や文学が拒否され、「いけにえ」にされたのではないかという気がしてならない。

一方、今日では、今日ならではの問題が生じている。それは、タゴールが特に嫌っていた「実用性」という基準の問題である。確かに、今でも学校の「国語」の授業で古典文学が取り上げられてはいる。しかし、その目的があくまでも「受験」にあるので、「全人類にとって貴重なもの」としての古典文学の普遍性や現代的な意味については誰も考える余裕はない。

もちろん、だからといって、すべての責任を教育になすり付けることはできない。「実用性」は、現代社会の一般的な基準であって、教育はその結果のひとつに過ぎないからだ。これはさげられない悪循環のような状態でもあり、また実は、日本に限っての問題でもなさそうだ。

だがそれにしても、まことにもったいない話ではないか。果たして日本古典文学は、現代の社会にそぐわないのだろうか。私たち現代人には、もはや無用の長物になってしまったのだろうか。

そもそも「古典」と呼ばれる文学作品は、それが世に出たとき以来、連綿と読み継がれてきたものである。言い換えれば、それぞれの時代の人たちがその作品のなかに自分にとって大切な何か——自分が考えること、感じること、志すこと、悩むことに対する答え、あるいは答えのヒントを見出してきたのだ。

そうだとすれば、現代の日本社会で日本古典文学の人氣が衰えてきた理由は、その文学が現代人にとって不用になったからだというよりも、現代人がその文学を自分の生き方と結びつけることができなくなったからではないか。現代人には、いま古典文学を読む意味、その現代的な意味が見えなくなったのではなからうか。

問一 以下のⅠ～Ⅴに答えよ。

- Ⅰ 傍線部1は、どのようなことを意味するか、分かりやすく説明せよ。
- Ⅱ 傍線部2は、どのようなことを意味するか、分かりやすく説明せよ。
- Ⅲ 傍線部3について、どのように変わったということが、説明せよ。
- Ⅳ 傍線部4について、どのような問題か、説明せよ。
- Ⅴ 波線部ア「膝を折る」、イ「無用の長物」の意味を、本文に即してそれぞれ簡潔に説明せよ。

問二 傍線部5の筆者の主張に対するあなたの考えを、六〇〇字以上八〇〇字以内で、原簿用紙にまとめよ。

博士前期課程試験問題（国文学）

注意

- 解答用紙は四枚（三枚）あります。※主たる専門分野を国文学とする者は四枚、国語学・漢文学とする者は三枚。
- 解答用紙の右端の欄外にそれぞれ国文学（※一〜二枚）・国語学・漢文学と、よく分かるように大きく書いて下さい。
※主たる専門分野を国文学とする者は二枚、国語学・漢文学とする者は一枚。
- 解答は問題別にそれぞれ解答用紙に書いて下さい。国文学、国語学、漢文学の問題の答えを、それぞれ国文学、国語学、漢文学と欄外に書いてある解答用紙に書いて下さい。
なお、国文学の解答用紙には、右端の欄外に選択した問題の番号を合わせて書き入れて下さい。
- 問題は全部で五枚あります。国文学（二枚）・国語学（一枚）・漢文学（二枚）です。
試験開始の合図があつたら、まず問題が全部そろっているか、確認して下さい。
- 問題用紙も試験終了後、回収しますが、メモ、下書きなどを問題用紙に書くことは差し支えありません。また、選択する問題だけが見やすいように、綴じ目はずしてばらばらにしても構いません。
- 提出の時は、問題も解答も配布された時と同じく、それぞれ重ねて提出して下さい。問題をばらばらにした場合、元の順序でなくても構いません。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士)・博士後期・前後期共通)

試験科目: 第 外国語 () / 専門科目 (国文学)

試験時間: (/20)分

□ 次のI群から三項目、II群から二項目を選び、それぞれ三行程度で説明せよ。

I群 a 挽歌 b 『栄花物語』 c 源俊頼 d 『発心集』 e 与謝蕪村

II群 a プロレタリア文学 b 自由劇場 c 『田園の憂鬱』

□ 次のI・IIのいずれかに答えよ。

I 次の文章を読んで後の問に答えよ。

じいねいありきり深草よすけら
女をわうくあきるこわ思えん
なよえらわ
年をへてらふこわ思えん
伴々深草野よわらえん

女
野ともはこらとありてあきえん
りはよまわは君んあき
とよありくるなやせしと思えん
ふくありまらえん

問一 全文を、適宜、濁点を補って翻字せよ。

問二 本文中の女が詠んだ歌について、次の問に答えよ。

(1) 掛詞を指摘せよ。

(2) 現代語訳せよ。

問三 傍線部のようになったのはなぜか、説明せよ。

II 次の文章は夏目漱石「虚子著『鶏頭』序」(『東京朝日新聞』明治四〇年一月二三日)の一部である。これを読んで後の問に答えよ。

斯様に小説を二つに分けて見た所で、¹虚子の小説はどつちに属するかと云ふと先づ前者即ち余裕のある方面に属すると思ふ。其余裕のある所が、²ある一派の人から見て気に入らぬ所であらうと思はれる。だからどんな所に余裕があると云ふ事を説明したらば、是等の人々の誤解を防いで、幾分か虚子の長所を發揮する方便になるだらうと思ふ。之を説明するには例を引くのが早分りである。

文章に、³低徊趣味と云ふ一種の趣味がある。是は便宜の爲め余の製造した言語であるから他人には解り様がなからうが先づ一と口に云ふと一事に即し一物に倒して、独特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと云ふ風な趣味を指すのである。だから低徊趣味と云はないでも依々趣味、恋々趣味と云つてもよい。所が此趣味は名前のあらはず如く出来る丈長く一所に佇立する趣味であるから一方から云へば容易に進行せぬ趣味である。換言すれば余裕がある人でなければ出来ない趣味である。閑人が買物に出ると途中で引かゝる。⁴交番の前で鼠をぶら下げてゐる小僧を見たり、天狗連の御姿を聴いたりして肝心の買物は中々弁じない。所が忙しい人になると、そんな余裕はない。買物に出たら買物が目的である。買物さへ買へば、それで目的は達せられたのである。小説も其通りである。篇中の人物の運命、ことに死ぬか活るか云ふ運命丈に興味を置いて居ると自然と余裕はなくなつてくる。従つてセツパ詰まつて低徊趣味は減じて来る。

問一 傍線部 1 について具体的に説明せよ。

問二 傍線部 2 について具体的に説明せよ。

問三 傍線部 3 について、「低徊趣味」と夏目漱石の創作との関連を具体的に説明せよ。

問四 傍線部 4 について、その社会背景を簡潔に説明せよ。

問五 「鶏頭」以後の高浜虚子の活動について、具体的に説明せよ。

問六 作家夏目漱石の誕生に、高浜虚子が果たした役割を簡潔に説明せよ。

III 国文学を主たる専攻とする者のみ答えよ。

日本文学の中で夢がどのように取り扱われ、作品にどのような効果をもたらしているか、具体的に論ぜよ。

(韻文・散文・戯曲のいずれを例としてもよい。また一つの作品を論じてても、複数の作品を論じててもよい。)

国文学

専攻

領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（ ） / 専門科目（国語学）

試験時間：（ 120 ）分

問題一 次の日本語研究に関連する事項・書名・人名についてそれぞれ説明せよ。

ア 四つ仮名

イ 『和字正濫鈔』

ウ P音考

エ 形態素

オ 大槻文彦

問題二 次のア～ウのうち、いずれか一つを選び、答えよ。

ア 現代日本語における助詞「は」の機能について、具体的に論ぜよ。

イ 「である」という表現の歴史について、具体例を挙げながら通時的に論ぜよ。

ウ 現代日本語における文字表記の特質について、他言語の表記法も視野に入れつつ具体的に論ぜよ。

問題三 「国語学を主たる専門分野とする受験生のみ答えよ」

文献に残る外国語による日本語の転写を日本語史の資料とすることについて、具体的に論ぜよ。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目：第 外国語 () / 専門科目 (漢文学)

試験時間：(120) 分

問題 1

次の文章を読んで後の問いに答えよ。

1 臣良言。臣聞建官擇賢其來有素。抗表薦士。義或可稱。爰
 2 自宗周逮茲。炎漢競微。茂異咸重。儒術竊見。臣境内寄住
 3 客。前信州司馬倉參軍李瀚。學藝淹通。理識精究。撰古人
 4 狀跡。編成音韻。屬對類事。無非典實。名曰蒙求。約三千言。
 5 注下轉相敷演。尚萬餘事。瀚家兒童。三數歲者。皆善諷誦。
 6 談古策事。無減鴻儒。不素諳知。謂疑神遇。司封員外郎李
 7 華。當代文宗。名望夙著。與作序云。不出卷而知天下。豈其
 8 蒙求哉。漢朝王子淵。製洞簫賦。漢帝美其文。令官人誦習。
 9 近代周興嗣。撰千字文。亦頒行天下。豈若蒙求。裁錯綜經
 10 史。隨便訓釋。童子則固多弘益。老成亦頗覽起予。

〔注〕

- 茂異：優れた才能の持ち主。
- 司馬倉參軍：官職名。
- 司封員外郎：官職名。
- 起予：自分を啓発してくれる。

(李良「薦蒙求表」)

国文学

専攻

領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（ ） / 専門科目（漢文学）

試験時間：（ 120 ）分

- 漢文学を専攻とする者のみ解答せよ。
- 問題 □ 『蒙求』の日本に於ける受容について論述せよ。
- （一）三行目「撰古人状跡く約三千言」を、『蒙求』がいかなる書物であるか分かるように口語訳せよ。
 - （二）五行目「注下轉相敷演、向萬餘事」を書き下し文にし、かつ口語訳せよ。
 - （三）八行目「漢朝王子淵く豈若蒙求哉」を書き下し文にし、かつ口語訳せよ。